

シリーズ 第71回

藤原景清と
坂手因幡守②

「古川村銘細帳」とは、安永六年（一七七七）に、古川村の自然・地理・史跡・人口・産業・寺社などを書き上げた、現在の町勢要覧のようなもので、二宮村（津山市二宮）の大庄屋を通じて津山藩に提出されたものの控えです。



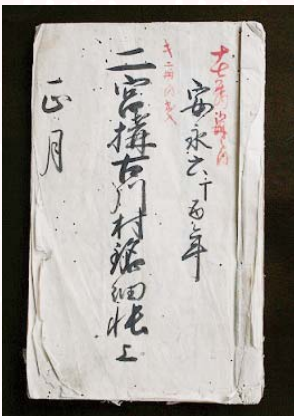
因幡殿付近（古川）

この中に村内の因幡殿という塚（墓）の解説があり、そこには先月号でも説明したように、

「昔、因幡という武士がここで討ち死にして葬った所である。相手や時代はわからない」とあります。『鏡野町史』民俗編によれば、地域に伝わる伝承として、この塚は因幡の住人、藤原筑後守景清が討ち死にしたとする説と、吉原村の住人坂手因幡守が討ち死にしたという二つの説があるとされています。

坂手因幡守については、美作地域の記録や伝説にいくつかが登場します。昭和三十三年（一九五八）に、美作の郷土史家・寺阪五夫氏の調査成果をまとめ刊行された『美作古城史』の中には、美作地域の城跡と城にまつわる古記録が詳細に調査されていますが、その中に書かれてある鏡野町沖の坂手氏系図の中に、

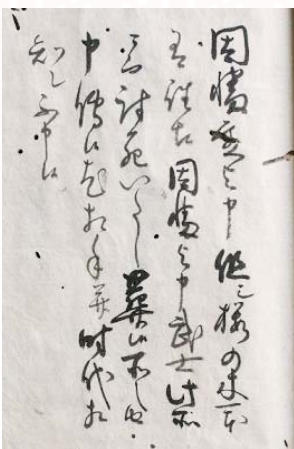
「坂手薩摩守に五子があり、長子
の坂手監物は作州三星城（美作市）



古川村銘細帳

に在城し、二子の坂手因幡守は作州加々美（香々美）井水山に在城し、後吉原村に住み、貞治六年（一三六七）九月一日に没す。清眼院殿本跡自休居士と号す。子孫は古川に住む（後略）」と書かれています。また、同書には津山市高尾の坂手家の系図も紹介しており、ここには、

「坂手監物、元弘二年（一二三二）に三星城において自害。その子、坂手因幡貞治六年九月一日に没す。墓は吉原村にあり、清眼院殿本室自休大居士と号す。その子勘三衛門は応安元年（一三六八）保正寺（宝性寺）を建立、その子勘解由はかつて黒川村と言われていた古川に住む」とあります。坂手監物と因幡守が兄弟関係か親子関係かということなど、いくつか違いはありますが、これらの家系図はそれぞれの家が後に作成したものと思われるので、多少の矛盾は差し置きまして、注目されるのは坂手因幡守が双方の系図において



古川村銘細帳 因幡殿の記述

貞治六年九月一日に亡くなり、本人やその子孫が吉原・古川に在住していると書かれていることです。その中でも、津山市高尾の坂手家系図では、因幡（守）の子が、父が亡くなった翌年に宝性寺を建立したと書かれています。

吉原・古川辺りに住み、貞治六年の秋に死亡、死後にその一族が宝性寺を建立、このような経歴は、すでにお気づきかと思いますが、先月号で紹介した藤原景清の言い伝えと非常に似ています。

これらをまとめると、「古川村銘細帳」にある「因幡という武士」は、やはり地元の伝承のとおり坂手因幡守を指す可能性が強いでしょう。また、この因幡守は藤原景清の経歴と共通する部分が多く、二人の間には何らかの深い関わりがあることがうかがえます。

それでは、この二人の関わりを検証するにあたり、他に二人に関するどのような記録や言い伝えが残されているのかということですが、これは来月号でお話したいと思います。

参考資料：『鏡野町史』民俗編・史料編、

『美作古城史』

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733